統計モデリング入門 2017 (c)

一般化線形モデル:ポアソン回帰

久保拓弥 kubo@ees.hokudai.ac.jp

北大環境科学院の講義 http://goo.gl/76c4i

2019-07-22

ファイル更新時刻: 2019-07-20 08:16

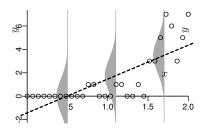
今日のハナシ I

- ポアソン回帰の統計モデル応答変数 y と説明変数 x
- ② ポアソン回帰の例題: 架空植物の種子数データ 植物個体の属性,あるいは実験処理が種子数に影響?
- GLM の詳細を指定する確率分布・線形予測子・リンク関数
- Rで GLM のパラメーターを推定 あてはまりの良さは 対数尤度関数で評価
- 処理をした・しなかった 効果も統計モデルに入れる GLM の因子型説明変数

今日のハナシ II

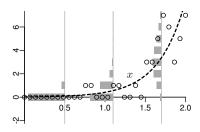
Normal distribution and identity link function

正規分布・恒等リンク関数の 統計モデル



Poisson distribution and log link function

ポアソン分布・log リンク関数の 統計モデル



今日の内容と「統計モデリング入門」との対応

http://goo.gl/Ufq2

今日はおもに「 $\hat{\mathbf{3}}$ 3 $\hat{\mathbf{0}}$ 一般化線形モデル (GLM)」の内容を説明します.

• 著者: 久保拓弥

• 出版社: 岩波書店

2012-05-18 刊行



一般化線形モデルって何だろう?

一般化線形モデル (GLM)

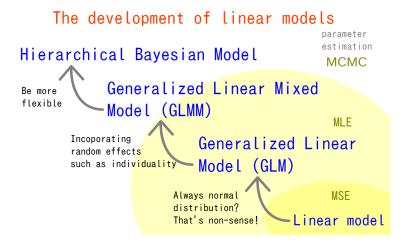
- ポアソン回帰 (Poisson regression)
- ロジスティック回帰 (logistic regression)
- 直線回帰 (linear regression)
-

1. ポアソン回帰の統計モデル

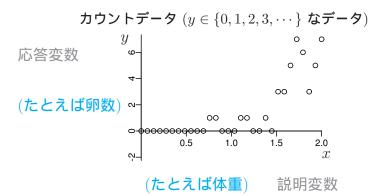
応答変数 y と説明変数 x

一般化線形モデルにとりくんでみる

この授業であつかう統計モデルたち



0 個, 1 個, 2 個と数えられるデータ

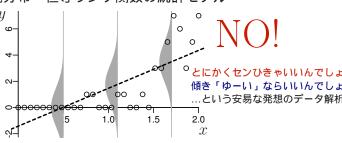


- たとえば x は植物個体の大きさ y はその個体の花数
- 体サイズが大きくなると花数が増えるように見えるが……
- この現象を表現する統計モデルは?

正規分布を使った統計モデル ムリがある?

正規分布・恒等リンク関数の統計モデル

応答変数



説明変数

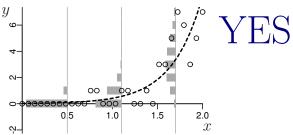
- タテ軸のばらつきは「正規分布」なのか?
- y の値は 0 以上なのに
- 平均値がマイナス?

9 / 45

ポアソン分布を使った統計モデルなら良さそう?!

ポアソン分布・対数リンク関数の統計モデル

応答変数



説明変数

- タテ軸に対応する「ばらつき」 fair distribution
- 負の値にならない「平均値」 non-negative mean
- 正規分布を使ってるモデルよりましだね bye-bye, the normal distribution

2. ポアソン回帰の例題: 架空植物の種子数データ

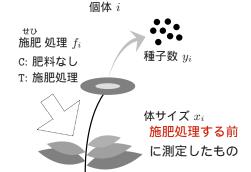
植物個体の属性,あるいは実験処理が種子数に影響?

Modeling number of seeds of plants using GLM

個体サイズと実験処理の効果を調べる例題

- 応答変数: 種子数 {y_i}
- 説明変数:
 - 体サイズ {x_i}
 - 施肥処理 $\{f_i\}$

標本数



- 無処理 $(f_i = C)$: 50 sample $(i \in \{1, 2, \dots 50\})$
- 施肥処理 $(f_i = T)$: 50 sample $(i \in \{51, 52, \cdots 100\})$

データファイルを読みこむ



data3a.csv は CSV (comma separated value) format file なので, R で読みこむには以下のようにする:

> d <- read.csv("data3a.csv")</pre>

データは d と名付けられた data frame (表みたいなもの) に格納される

とりあえず data frame d を表示

> d

y x f

1 6 8.31 C 2 6 9.44 C

0 0 50 0

3 6 9.50 C

...(中略)...

99 7 10.86 T

100 9 9.97 T

data frame d を調べる: 連続値と整数値

```
> d$x
 [1]
    8.31 9.44 9.50 9.07 10.16 8.32 10.61 10.06
 [9] 9.93 10.43 10.36 10.15 10.92 8.85 9.42 11.11
...(中略)...
 [97] 8.52 10.24 10.86 9.97
> d$y
 [1] 6 6 6 12 10 4 9 9 9 11 6 10 6 10 11 8
 [17] 3 8 5 5 4 11 5 10 6 6 7 9 3 10 2 9
...(中略)...
 [97] 6 8 7 9
```

data frame d を調べる: "因子型"のデータ

施肥処理の有無をあらわす f 列はちょっと様子がちがう

<mark>因子型データ</mark>: いくつかの水準をもつデータ ここでは C と T の 2 水準

Levels: C T

Rのデータのクラスとタイプ

```
> class(d) # d は data.frame クラス
[1] "data.frame"
> class(d$y) # y 列は整数だけの integer クラス
[1] "integer"
> class(d$x) # x 列は実数も含むので numeric クラス
[1] "numeric"
> class(d$f) # そして f 列は factor クラス
[1] "factor"
```

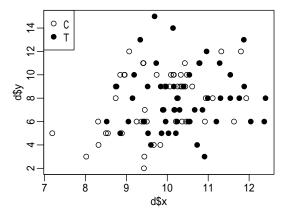
data frame O summary()

```
> summary(d)
```

```
X
Min.
       : 2.00
               Min. : 7.190
                                C:50
               1st Qu.: 9.428
1st Qu.: 6.00
                                T:50
Median: 8.00
               Median: 10.155
               Mean :10.089
Mean : 7.83
3rd Qu.:10.00
               3rd Qu.:10.685
Max. :15.00
               Max. :12.400
```

データはとにかく図示する!

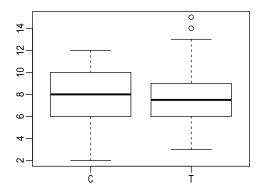
```
> plot(d$x, d$y, pch = c(21, 19)[d$f])
> legend("topleft", legend = c("C", "T"), pch = c(21, 19))
```



散布図

施肥処理 f した・しないの箱ひげ図 (box-whisker plot)

> plot(d\$f, d\$y) # note that d\$f is factor type!



3. GLM の詳細を指定する

確率分布・線形予測子・リンク関数

ポアソン回帰では log link 関数を使うのが便利

一般化線形モデルを作る

- 一般化線形モデル (GLM)
 - 確率分布は?
 - 線形予測子は?
 - リンク関数は?

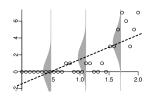
GLM のひとつである直線回帰モデルを指定する

直線回帰のモデル

- 確率分布: 正規分布
- 線形予測子: e.g., $\beta_1 + \beta_2 x_i$

直線の式: (切片) + (傾き) $\times x_i$

リンク関数: 恒等リンク関数



線形モデルの予測子, predictor of linear model

- 応答変数 (response variable)
- 説明変数 (explanatory variable)
- 係数 (coefficient)
- 線形予測子 (linear predictor):

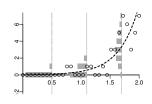
GLM のひとつであるポアソン回帰モデルを指定する

ポアソン回帰のモデル

• 確率分布: ポアソン分布

• 線形予測子: e.g., $\beta_1 + \beta_2 x_i$

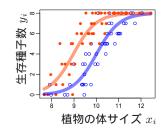
リンク関数: 対数リンク関数



GLM のひとつである logistic 回帰モデルを指定する

ロジスティック回帰のモデル

- 確率分布: 二項分布
- 線形予測子: e.g., $\beta_1 + \beta_2 x_i$
- リンク関数: logit リンク関数

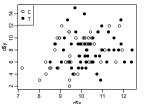


R で一般化線形モデル (GLM) の推定を......

	確率分布	乱数発生	GLM あてはめ
(離散)	ベルヌーイ分布	rbinom()	<pre>glm(family = binomial)</pre>
	二項分布	rbinom()	<pre>glm(family = binomial)</pre>
	ポアソン分布	rpois()	<pre>glm(family = poisson)</pre>
	負の二項分布	<pre>rnbinom()</pre>	<pre>glm.nb() in library(MASS)</pre>
(連続)	ガンマ分布	rgamma()	<pre>glm(family = gamma)</pre>
	正規分布	rnorm()	<pre>glm(family = gaussian)</pre>

- glm() で使える確率分布は上記以外もある
- GLM は直線回帰・重回帰・分散分析・ポアソン回帰・ロジスティック回帰その他の「よせあつめ」と考えてもよいかも

さて,種子数の例題にもどって...



種子数 y_i は平均 λ_i のポアソン分布にしたがう としましょう

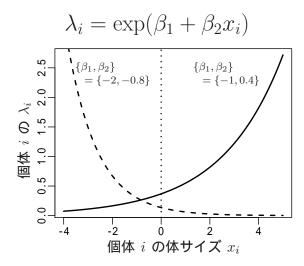
$$p(y_i \mid \lambda_i) = \frac{\lambda_i^{g_i} \exp(-\lambda_i)}{y_i!}$$

個体 i の平均 λ_i を以下のようにおいてみたらどうだろう.....?

$$\lambda_i = \exp(\beta_1 + \beta_2 x_i)$$

- β₁ と β₂ は係数 (パラメーター)
- ullet x_i は個体 i の体サイズ , f_i はとりあえず無視

指数関数ってなんだっけ?



GLM のリンク関数と線形予測子 ← (直線の式)

個体 i の平均 λ_i

$$\lambda_i = \exp(\beta_1 + \beta_2 x_i)$$

$$\updownarrow$$

$$\log(\lambda_i) = \beta_1 + \beta_2 x_i$$

$$\log(\mathbf{v}) = \mathbf{k} \mathbf{F} \mathbf{j} \mathbf{j}$$

log リンク関数とよばれる理由は , 上のようになっているから

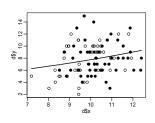
この例題のための統計モデル

ポアソン回帰のモデル

• 確率分布: ポアソン分布

• 線形予測子: $\beta_1 + \beta_2 x_i$

リンク関数: 対数リンク関数



4. Rで GLM のパラメーターを推定

あてはまりの良さは 対数尤度関数で評価

推定計算はコンピューターにおまかせ

glm() 関数の指定

```
> d
   y x f
1 6 8.31 C
2 6 9.44 C
3 6 9.50 C
...(中略)...
99 7 10.86 T
100 9 9.97 T
```

これだけ!

> fit <- glm(y ~ x, data = d, family = poisson)</pre>

glm() 関数の指定の意味

```
結果を格納するオブジェクト
                     モデル式
          関数名
 <- glm(
                   確率分布の指定
   х,
family = poission(link = "log"),
data = d
              ∼リンク関数の指定(省略可)
  data frame の指定
```

- モデル式 (線形予測子 z): どの説明変数を使うか?
- link 関数: z と応答変数 (y) 平均値 の関係は?
- family: どの確率分布を使うか?

33 / 45

glm() 関数の出力

```
> fit <- glm(y ~ x, data = d, family = poisson)</pre>
all: glm(formula = y ~ x, family = poisson, data = d)
Coefficients:
(Intercept)
                      X
     1.2917 0.0757
Degrees of Freedom: 99 Total (i.e. Null); 98 Residual
Null Deviance: 89.5
```

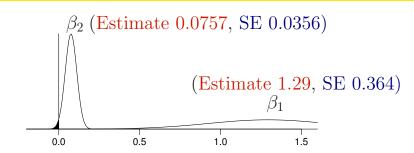
Residual Deviance: 85

ATC: 475

glm() 関数のくわしい出力

```
> summary(fit)
Call:
glm(formula = y ~ x, family = poisson, data = d)
Deviance Residuals:
  Min 1Q Median 3Q Max
-2.368 -0.735 -0.177 0.699 2.376
Coefficients:
          Estimate Std. Error z value Pr(>|z|)
(Intercept) 1.2917 0.3637 3.55 0.00038
            0.0757 0.0356 2.13 0.03358
X
```

.....(以下,省略).....



- ●確率 p は ゼロからの距離 をあらわしている
- ullet p がゼロに近いほど ${f \mu}$ 定値 \hat{eta} はゼロから離れている
- ullet p が 0.5 に近いほど 推定値 \hat{eta} はゼロに近い

(注: 頻度主義的な信頼区間の正しい解釈はもっとめんどくさい)

モデルの予測

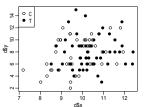
```
> fit <- glm(y ~ x, data = d, family = poisson)</pre>
Coefficients:
(Intercept)
                       x
     1,2917
                 0.0757
> plot(d$x, d$y, pch = c(21, 19)[d$f]) # data
> xp <- seq(min(d$x), max(d$x), length = 100)
                                        4-
> lines(xp, exp(1.2917 + 0.0757 * xp))
                                        ₽.
                                       d$y
ここでは観測データと予測の関係
を見ているだけ、なのだが
                                        9-
                                        4-
                                        2
                                                              12
                                                     d$x
```

5. 処理をした・しなかった 効果も統計モデルに入れる

GLM の因子型説明変数

数量型 + 因子型 という組み合わせで

肥料の効果 f_i もいれましょう



種子数 y_i は平均 λ_i のポアソン分布にしたがう としましょう

$$p(y_i \mid \lambda_i) = \frac{\lambda_i^{y_i} \exp(-\lambda_i)}{y_i!}$$

個体 i の平均 λ_i を次のようにする

$$\lambda_i = \exp(\beta_1 + \beta_2 x_i + \beta_3 d_i)$$

- β₃ は施肥処理の効果 の 係数
- f_i のダミー変数

$$d_i = \left\{ egin{array}{ll} 0 & (f_i = \mathtt{C} \ \mathfrak{O}$$
場合) $1 & (f_i = \mathtt{T} \ \mathfrak{O}$ 場合)

glm(y ~ x + f, ...) の出力

```
> summary(glm(y ~ x + f, data = d, family = poisson))
...(略)...
```

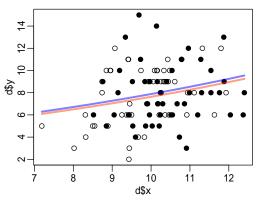
Coefficients:

```
Estimate Std. Error z value Pr(>|z|)
(Intercept) 1.2631 0.3696 3.42 0.00063
x 0.0801 0.0370 2.16 0.03062
fT -0.0320 0.0744 -0.43 0.66703
```

.....(以下,省略).....

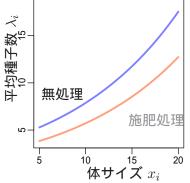
x + f モデルの予測

- > plot(d\$x, d\$y, pch = c(21, 19)[d\$f]) # data
- > $xp \leftarrow seq(min(dx), max(dx), length = 100)$
- > lines(xp, exp(1.2631 + 0.0801 * xp), col = "blue", lwd = 3) # C
- > lines(xp, exp(1.2631 + 0.0801 * xp 0.032), col = "red", lwd = 3) # T



複数の説明変数をいれた場合の統計モデル

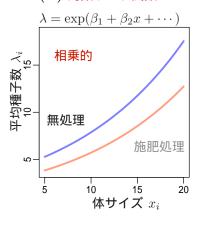
- $f_i = C$: $\lambda_i = \exp(1.26 + 0.0801x_i)$
- $f_i = T$: $\lambda_i = \exp(1.26 + 0.0801x_i 0.032)$ $= \exp(1.26 + 0.0801x_i) \times \exp(-0.032)$



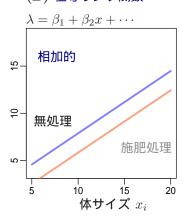
施肥効果である $\exp(-0.032)$ は かけ算できくことに注意!

リンク関数が違うとモデルの解釈が異なる

(A) 対数リンク関数

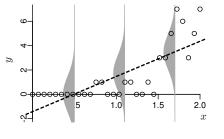


(B) 恒等リンク関数

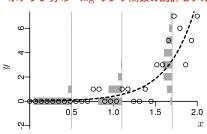


GLM: 適切な確率分布 とリンク関数を選ぶ

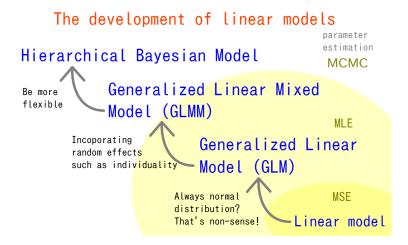
正規分布・恒等リンク関数の統計モデル



ポアソン分布・log リンク関数の統計モデル

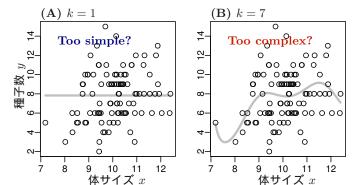


この授業であつかう統計モデルたち



次回予告

The next topic



モデル選択と統計学的検定

Model selection and statistical test